立教大学キリスト教学会報告
（2022 年 1 月～ 2022 年 12 月）

学校行事

1 月 17 日（月）

キリスト教学科主催映画上映会（オンライン開催）

「映画『地の塩　山室軍平』および監督トーク」

講師：東條政利氏（映画監督）

2 月 19 日（土）

キリスト教学研究科主催レクチャーコンサート

「ザムエル・シャイトの複合唱作品をめぐって―「ドイツオルガン音楽の父」の声楽作品再評価への試み―」

講師：大角欣矢氏（東京藝術大学音楽学部楽理科教授）、米沢陽子氏（本学特任教授）演奏：サリクス・カンマーコア Salicus Kammerchor

3 月 4 日（金）

第 130 回幹事会（出席者 12 名）

『キリスト教学』63 号納品予定の報告

「キリスト教学科ニュースレター」の内容報告

2022 年度春の大会・総会について

2021 年度決算案・2022 年度予算案について

新入生プログラムについて

卒業生を送る会について

『キリスト教学』次号について

2022 年度の方針について

5 月 21 日（土）

立教大学キリスト教学会 2022 年度大会

〈研究発表〉（司会：長谷川修一）

鈴木めぐみ氏「日本における会衆賛美の歴史的変遷への一考察―由木康の貢献を中心に―」

星野香乃氏「礼拝奏楽初心者のための入門用オルガン手引書への一試案」

〈講演〉（司会：長谷川修一）

米沢陽子氏「ザムエル・シャイトの音楽語法―宗教的声楽作品と鍵盤作品を手掛かりに―」

〈総会〉（司会：長谷川修一）

１．2021 年度事業報告

２．2021 年度会計報告

３．役員改選

４．2022 年度予算案審議

５．その他

〈2022 年度幹事氏名〉

長谷川修一、廣石望、加藤喜之（以上教員）、岩田成就、大石昌孝、金井美彦、工藤万里江、倉澤智子、鈴木淳之介、村上信児、山田香里、山本剛史郎、渡辺悦子（以上一般会員）、久米淳嗣、稲船睦、小川将宗、KANG MUNSEOK、西岡新、藤野結希、飯岡優菜、小川七海、久保田真綾、鈴木泰心、高木遼河、手束響希、八木日菜子、吉田ひかり、大川裕太郎、岡迫小夏、柴﨑威堂、髙橋大地、肥留川妃菜、嶺村更紗、八色千夏、山本愛、卜部すみれ、菊池健介、志田尚優、城村嘉礼武、長谷川珠樹、宮島グレース（以上学生会員）

第 131 回幹事会（出席者 12 名）

『キリスト教学』63 号発行の報告

2022 年度学会組織・幹事役割分担確認
『キリスト教学』64 号編集方針について
2022 年度秋の講演会について
2022 年度学科 1 年生交流会開催について
2023 年度秋の講演会について
会費滞納者への案内について
「『キリスト教学』執筆に関する諸注意」について

7 月 4 日（月）
第 132 回幹事会（出席者 12 名）
『キリスト教学』64 号進捗状況について
2022 年度秋の講演会について
2022 年度学科 1 年生・3 年生交流会開催について
2022 年度卒業パーティーについて
2023 年度活動計画について
「『キリスト教学』執筆に関する諸注意」について

7 月 5 日（火）
キリスト教学科主催公開シンポジウム（オンライン開催）
「現代に生きる芸術、文化、宗教―国際芸術祭「あいち 2022」から―」
講師：西原廉太氏（本学総長／日本聖公会中部教区主教）、片岡真実氏（森美術館館長／国際芸術祭あいち 2022 芸術監督）、拝戸雅彦氏（愛知県美術館館長）、奈良美智氏（現代美術作家）、加藤磨珠枝氏（本学教員）

7 月 28 日（木）
キリスト教学科主催公開講演会（ハイブリッド開催）
「日本のキリスト教会の「雰囲気」の比較研究」
講師：シャルバトダール・ドニヤ氏（ボーフム大学助教／本学客員研究員）

9 月 16 日（金）
学生幹事会主催「キリスト教学科 1 年生交流会」「キリスト教学科 3 年生交流会」

11 月 26 日（土）
日本聖書学研究所主催、キリスト教学研究科後援公開講演会（ハイブリッド開催）
「公開講座：終末論のゆくえ」
講師：上村静氏「古代ユダヤ思想における終末論と創造論」（尚絅学院大学総合人文科学系教授）、大貫隆氏「神も途上に・再考」（東京大学名誉教授）

12 月 3 日（土）
2022 年度キリスト教学会公開講演会（ハイブリッド開催）
「日本聖公会における女性の聖職按手の課題」
講師：笹森田鶴氏（日本聖公会北海道教区主教）

12 月 23 日（金）
新約聖書図像研究会主催、キリスト教学研究科後援公開講演会
「公開講座：キリスト教美術の諸相」
講師：菅野裕子氏「建築と音楽の出会い：サン・マルコ聖堂とフィレンツェ大聖堂」（横浜国立大学大学院特別研究教員）、永井隆則氏「セザンヌとキリスト教」（京都市立芸術大学非常勤講師）

会員動向

会員数・準会員数（2021 年 12 月現在）

会員	（1）一般	109 名
	（2）学生　学　部	196 名

	大学院	27 名
	合　計	332 名
準会員		9 名
総計		341 名

文学部キリスト教学科・大学院キリスト教学研究科報告

2021 年度文学部キリスト教学科卒業論文題目

宮川　　翔　同性愛者解放運動の歴史―アメリカ社会の文脈から―

百木亜理沙　日本における同性婚実現の可能性に迫る―共生社会を目指して―

野村　遥香　パウラ・モーダーゾーン＝ベッカー研究

丹波　早雪　ベリーダンスと女性のからだの奪還

小川　将宗　ルカ福音書の誕生物語（1～2 章）における、女性表象とローマ帝国イデオロギー―受胎告知の場面を中心に―

モウ　シギ　近代中国キリスト教女子教育から見る女性解放―北京ブリッジマン女子学校と華北協和女子大学を中心に―

嶺田　楓子　16–17 世紀の南蛮漆器研究―花鳥蒔絵螺鈿聖龕を中心に―

ショウリョウキ　近現代中国における儒教の認知に見られる変動

海老原留衣　よく生きるとはどういうことか

長井美綾乃　ヨハネ福音書 20 章及びマリアの福音書におけるマグダラのマリア像に関する考察

石井真紀奈　キース・ヘリング《オルターピース：キリストの生涯》研究―31 年間の人生を踏まえて―

水野　百香　同性カップルと子育ての〈かたち〉

村田　美咲　「食べること」とマナー―食事の際に料理を写真に撮る行為について―

2021 年度キリスト教学研究科前期課程（キリスト教学研究コース）修士論文題目

ガクイウェイ　諸福音書の塗油物語の比較研究―修辞学の視点から―

石井祐三子　ゲルトルート・フォン・ル・フォールにおける強さと弱さについて

2021 年度キリスト教学研究科前期課程（ウィリアムズコース）課題研究報告書題目

二田眞知子　「ヒム・フェスティヴァル」は地域を巻き込み教会を活性化できるか

鈴木めぐみ　日本における会衆賛美の歴史的変遷への一考察―由木康の貢献を中心に―

星野　香乃　礼拝奏楽初心者のための入門用オルガン手引きへの一試案

学科・研究科消息

（2022 年 1 月～ 2022 年 12 月）

1 月 6 日（木）　冬季休業終了

1月17日（月）　修士論文・課題研究報告書・博士論文中間報告書提出締切
1月24日（月）　秋学期授業終了
1月28日（金）　論文・課題研究報告書最終面接
2月11日（金）　文学部入試
2月22日（火）・23日（水）　大学院キリスト教学研究科入学試験
3月24日（木）　文学部卒業式・卒業礼拝
3月25日（金）　大学院学位授与式
学部卒業生・大学院修了者数
文学部キリスト教学科　47名
大学院キリスト教学研究科
前期課程
キリスト教学研究コース　2名
ウィリアムズコース　3名
4月2日（土）　1～4年次・大学院ガイダンス
4月4日（月）　兼任講師オンライン懇親会
4月7日（木）　文学部キリスト教学科、キリスト教学研究科入学式
学部新入生・大学院新入生数
文学部キリスト教学科
1年次　50名
大学院キリスト教学研究科
前期課程
キリスト教学研究コース　4名
ウィリアムズコース　1名
後期課程　1名
4月11日（月）　春学期授業開始
7月19日（火）　春学期授業終了
8月1日（月）～9月17日（土）　夏季休業
9月16日（金）　大学院学位授与式、9月特別卒業式
9月20日（火）　秋学期授業開始
9月24日（土）　大学院キリスト教学研究科博士課程前期課程　秋季入学試験
10月1日（土）　論文・課題研究報告書中間発表会
11月2日（水）～11月7日（月）　秋季臨時休業
11月19日（土）　文学部秋季入試
12月15日（木）　卒業論文提出締切
12月24日（土）～2023年1月5日（木）冬季休業

人　事

平間香織氏、2021年12月1日付で学部事務1課キリスト教学科担当職員となる。
長谷川修一教授、2022年4月1日付でキリスト教学科学科長に就任。
廣石望教授、2022年4月1日付でキリスト教学研究科研究科委員長に就任。
阿部善彦教授、2022年度春学期育児休暇、秋学期研究休暇。
ゾンターク・ミラ教授、2022年度秋学期研究休暇。

2022年度菅円吉記念奨学金奨学生

藤方　玲衣

2022年度文学部キリスト教学科課程

Ⅰ．文学部基幹科目（A～D）
基幹科目A　――2年次2単位必修
基幹科目B・C・D

──1 ～ 4 年次 10 単位選択

当学科関係者の担当科目は次の通り。

倫理思想　柳堀 素雅子 講師
宗教思想 1・2　岩田 成就 講師
ギリシア語 1・2　吉田 俊一郎 講師
ヘブライ語 1・2　宮崎 修二 講師
ラテン語 1・2　村上 寛 講師

Ⅱ．キリスト教学科専門科目

指定科目Ａ

──1 ～ 2 年次 8 単位自動登録

1 年次必修科目（4 単位）

入門演習Ａ 1a　ゾンターク・ミラ教授
入門演習Ａ 1b　梅澤 弓子 教授
入門演習Ａ 2a　梅澤 弓子 教授
入門演習Ａ 2b　加藤 喜之 准教授

2 年次必修科目（4 単位）

キリスト教学基礎演習 A1a　長谷川 修一 教授
キリスト教学基礎演習 A1b　本年度休講
キリスト教学基礎演習 A2a　加藤 磨珠枝 教授
キリスト教学基礎演習 A2b　本年度休講

指定科目Ｂ１（演習）

──3 ～ 4 年次に 8 単位選択

演習 A1　加藤 磨珠枝 教授
演習 A2　加藤 喜之 准教授
演習 A3　藤原 佐和子 講師
演習 A4　廣石 望 教授
演習 A5　ゾンターク・ミラ 教授
演習 A6　後藤 里菜 講師
演習 A7　長谷川 修一 教授
演習 A8　梅澤 弓子 教授
演習 A9　米沢 陽子 教授
演習 A10　米沢 陽子 教授
演習 A11　加藤 磨珠枝 教授
演習 A12　加藤 喜之 准教授
演習 A13　長下部 穣 講師
演習 A14　廣石 望 教授
演習 A15　工藤 万里江 講師
演習 A16　後藤 里菜 講師
演習 A17　長谷川 修一 教授
演習 A18　梅澤 弓子 教授

指定科目Ｂ２（フィールドワーク・原典講読）

──指定科目 C と合わせて 40 単位選択

（履修可能学年：2 ～ 4 年次）

フィールドワークＡ１　金 迅野 准教授
キリスト教学特論　スコット・ショウ 教授
ヘブライ語講読 2　杉江 拓磨 講師
ギリシア語講読 2　吉田 俊一郎 講師
ラテン語講読 2　桑原 直巳 講師
ヘブライ語購読 1　杉江 拓磨 講師
ギリシア語購読 1　本年度休講
ラテン語購読 1　村上 寛 講師

指定科目Ｃ（講義）

──指定科目 B2 と合わせて 40 単位選択

（履修可能学年：1 ～ 4 年次）

キリスト教学入門講義 1（聖書 1）　岩嵜 大悟 講師
キリスト教学入門講義 2（聖書 2）　赤城・マシュー海 講師
キリスト教学入門講義 3（キリスト教史 1）　鶴岡 賀雄 講師
キリスト教学入門講義 4（キリスト教史 2）　須藤 孝也 講師
キリスト教学入門講義 5（宗教と文化 1）

飯郷 友康 講師
高橋 英海 講師
キリスト教学入門講義 6（宗教と文化 2）
本年度休講
キリスト教学講義 1（旧約聖書学 1）
岩嵜 大悟 講師
キリスト教学講義 2（旧約聖書学 2）
本年度休講
キリスト教学講義 3（新約聖書学 1）
本年度休講
キリスト教学講義 4（新約聖書学 2）
田中 健三 講師
キリスト教学講義 5（キリスト教思想史 1）
鶴岡 賀雄 講師
キリスト教学講義 6（キリスト教思想史 2）
本年度休講
キリスト教学講義 7（比較宗教学 1）
佐藤 清子 講師
キリスト教学講義 8（比較宗教学 2）
本年度休講
キリスト教学講義 9（神学思想 1）
鳥居 雅志 講師
キリスト教学講義 10（神学思想 2）
本年度休講
キリスト教学講義 11（キリスト教倫理学 1）
本年度休講
キリスト教学講義 12（キリスト教倫理学 2）
田島 靖則 講師
キリスト教学講義 13（宗教社会学）
本年度休講
キリスト教学講義 14（宗教心理学）
長下部 穣 講師
キリスト教学講義 15（キリスト教と教育 1）
本年度休講
キリスト教学講義 16（キリスト教と教育 2）
市川 誠 教授
キリスト教学講義 17（アジアのキリスト教 1）
本年度休講
キリスト教学講義 18（アジアのキリスト教 2）
藤原 佐和子 講師
キリスト教学講義 19（アジアの宗教 1）
本年度休講
キリスト教学講義 20（アジアの宗教 2）
林 隆嗣 講師
キリスト教学講義 21（キリスト教と美術 1）
本年度休講
キリスト教学講義 22（キリスト教と美術 2）
中西 麻澄 講師
キリスト教学講義 23（キリスト教と音楽 1）
本年度休講
キリスト教学講義 24（キリスト教と音楽 2）
國友 淑弘 講師
キリスト教学講義 25（キリスト教美術史 1）
本年度休講
キリスト教学講義 26（キリスト教美術史 2）
天野 知香 講師
キリスト教学講義 27（キリスト教音楽学 1）
本年度休講
キリスト教学講義 28（キリスト教音楽学 2）
大島 博 講師
キリスト教学講義 33（キリスト教の礼拝 1）
市原 信太郎 講師
キリスト教学講義 34（キリスト教の礼拝 2）
本年度休講
キリスト教学講義 35（キリスト教と現代社会 1）
工藤 万里江 講師
キリスト教学講義 36（キリスト教と現代社会 2）
本年度休講
キリスト教学講義 37（日本キリスト教史）
本年度休講

キリスト教学講義 38（日本宗教史）
丹羽 宣子 講師

［4 年次履修・合わせて 10 単位］
卒業論文（制作）
卒業論文（制作）指導演習

2022 年度キリスト教学研究科キリスト教学専攻講義内容

キリスト教学共同演習 1　　全専任教員

研究倫理および論文執筆における注意事項、研究論文や研究報告書の様々な理論的・方法論的アプローチについて学ぶ。

図書館の使い方を確認し、情報検索の方法を身につける。また研究において求められる倫理および論文執筆のルールを学ぶ（引用のし方や注の付け方などのルールを無視した結果、研究不正と見なされる事態を招く可能性があることに注意）。その上で論文や研究報告書の執筆に不可欠な基礎技法を学ぶ。

キリスト教学共同演習 2　　全専任教員

専攻所属教員と院生の参加による、研究発表とそれを巡る議論を通して、研究課題や問題を共有し、研究上の視野拡大と理解の深化を目指す。

参加する院生が、各自の研究テーマについて行う研究発表を基本とする。各研究発表について、全参加者による質疑応答と議論が行われ、テーマの展開と深化がはかられる。それを受けて発表者各自が調査・研究を進展させ、探求課題の修正と進展を盛り込んだうえで、最終的に論文にまとめ上げる。

アングリカニズム・エキュメニズム研究
市原 信太郎 講師

〈エキュメニズムの特質と可能性〉

聖公会（アングリカン教会）の礼拝用書である祈祷書の研究を通して、アングリカン神学の特徴を学ぶ。また、祈祷書が形となる過程でのエキュメニカルな関わりを考察する。

1549 年イングランド教会第 1 祈祷書以来の祈祷書史を概観した後、現代の祈祷書について特徴を整理しつつ、日本聖公会の祈祷書についても学ぶ。

キリスト教倫理学研究　　梅澤 弓子 教授

〈いのちをめぐる課題への呼応〉

差し迫る「いのち」をめぐる課題を受けて、キリスト教倫理学からの応答の可能性を考える。

「いのち」をめぐって提起されている諸課題のうちから各参加者が自身の関心に応じて一つのテーマを取り上げて発題し、その後に全員で議論を行う。授業の進め方については、参加者と相談の上、柔軟に対応したい。

現代神学思想研究　　須藤 孝也 講師

〈「神の似姿」について〉

1. 学術文献を正確に読み取ることができる。2. 積極的に議論することができる。

クラウディア・ウェルツの Humanity in God’s Image を読み、議論する。

昨年度は 35 頁まで読み進みました。今年度はその続きです。ゆっくり丁寧に読んでいきます。

古代イスラエル研究　　長谷川 修一 教授
〈「イスラエル」の起源を探る〉

「イスラエル」出現をめぐる先行研究とその問題点を理解し、考古学と文献史学それぞれの資料の特性を把握しつつ、研究者がこの問題にどのような思想的前提を投影してきたのかについて考察する。

「イスラエル」はいつどのように出現したのか。「イスラエル」出現をめぐる先行研究をふりかえり、その問題点を考察する。考古学と、聖書学を含む文献史学それぞれの資料の特性を概観する。それぞれの仮説に、研究者がどのように自らの思想的前提を投影してきたのかについて討論を通して考察する。

原始キリスト教研究　　吉田 忍 講師
〈「テサロニケの信徒への手紙一」釈義〉

パウロ書簡を原典テクストから釈義することで、釈義の基本を学ぶ。

発表者は、注解書や論文等を参考にしつつ担当箇所の訳および釈義を作成し、それを発表する。その後、参加者全員による検討を行う。

キリスト教史研究　　菊地 智 講師
〈中世フランドルの霊性史〉

中世フランドル（現在のベルギー北部地域）のキリスト教思想は、ヨーロッパの霊性史の中で重要な意義を有しているにもかかわらず、その成果は日本ではまだあまり知られていません。それは残された作品が、あるいはそれについての研究文献の多くが、現代の日本では学習されることのほとんどないオランダ語で書かれているためもあるでしょう。受講者には、中世フランドルのキリスト教思想の伝統に触れる機会を持っていただくとともに、キリスト教霊性史（神学、典礼、宗教文学、宗教実践などを含んだ広範な精神史）というものに対する見方を、それぞれの興味、関心から広め、深めていただきたいと思います。

中世フランドルの重要な思想家の作品をいくつか選んで講読します。原著の日本語訳を配布します。作品の歴史的・社会的背景についても適宜解説します。

キリスト教美術研究　　大野 松彦 講師
〈中世建築史（4-15 世紀）〉

西洋中世の建築芸術について学び、その視覚的効果、構造的特質、宗教的機能について考察すること。

授業は講義と演習を組み合わせて行なう。演習内容は、受講生の人数と関心に応じて決まります。

建築は、絵画と彫刻とともに三芸術の一角を担うものだが、中世においては特に、指導的地位と重要な役割を有していた。なぜなら最たるモニュメンタル芸術であり、彫刻も絵画（壁画）も教会建築の壁面装飾から発達したためである。神の家として教会建築とその装飾は中世美術における最大の芸術的課題だった。この授業は、中世美術史の主要な三時代（初期中世［5-10 世紀］、ロマネスク［11-12 世紀］、ゴシック［12-15 世紀］）の建築を論じ、建築作品を見ること、空間ないし空間芸術はどのように知覚され認識されるか、そうした感性的認識をどのように記述するか、これら

について実践する。

比較宗教研究　　久保田 浩 講師
〈宗教学的キリスト教研究の可能性〉

「宗教」という現象への宗教学的アプローチとキリスト教学的アプローチは、分析上のどのような視座を相互に共有しているのだろうか。あるいは理論的・方法論的な観点から見て、両者の間にはいかなる差異が存在するのであろうか。昨今、学際的な志向が顕著となりつつある宗教研究における方法論的・理論的議論を介して、キリスト教研究が抱える問題点ならびに可能性を照射し、各自の具体的な研究活動における学問論的反省の重要性を認識する。

宗教研究は19世紀中葉以降、宗教現象や宗教システムを「学問的」(「非神学的」、「非宗派的」) に論じることを目的として掲げた比較的若い学問分野である。これは西洋の文脈において、「宗教」を論じる学問としての自己理解を確立していた「神学」との間に対象領域画定を巡る問題が生起せざるを得なかったということを意味している。こうした緊張関係の中に当初から位置し続けた宗教研究が、その後展開してきた(特に20世紀最後の四半世紀以降の) 方法論・理論を考察することによって、それらが現在のキリスト教研究に対して果たしうる貢献の可能性と、宗教研究・キリスト教研究の両者が抱える学問論的問題を明らかにする。本授業では、文献(主に英語文献) の講読とそれに基づく発表・議論を行う。

アジア・キリスト教研究　折井 善果 講師
〈グローバル・ミッションにおける「適応」を考える (近世初期日本、およびその比較としての世界)〉

多種多様な言語・文化・法体系を有する世界の諸民族に、唯一の真理としてのキリスト教を受け入れさせるために、どのような試みがなされ、またそれはどのような結果をもたらしたのか。このことを、イエズス会の日本布教をはじめとする、近世初期のグローバル・ミッションにおける諸事例を検討しながら考察する。

原住民の宗教・言語・礼儀作法を徹底して学び、現地人との信頼関係を築き上げ、宣教の土壌を養うという意味での実践知は、「適応 Accommodation」という概念で学問的に定着している。本授業で指定したテクストは、アジア (日本・中国・インド) と中南米 (ペルー・メキシコ・パラグアイ) における近世初期カトリック世界宣教の「適応」の諸事例を考察し、6つのテーマに分類した各章からなる。各章の担当者を初回の授業で決定するので、担当者はそれを要約・敷衍・発展させるかたちで発表し、授業中のディスカッションを通じて、この「適応」という概念の具体的事例に関する知見を広め、多様化・相対化する現代社会における宣教との共通点や差異を見出していきたい。

フィールドスタディ1　　金 迅野 准教授
〈「ともに生きる」ことの思想と実践〉

「人権」、「多文化共生」などの概念の成り立ちについて理解し、「共に生きる」ことを阻害する事態はなぜ生じるのか、それらを克服するためにそれらの概念がフィールド／実生活のなかでどのように活かされ

うるかを考察する。

「人権」、「多文化共生」などの概念をめぐる様々な課題と論考について理解を深めると同時に、「フィールド／生活世界」で起きたこと、起きていることの断片を理解し、生じている矛盾や具体的な個が背負う困難を克服するためのさまざまな人びとの努力やその背後に横たわる個人の「声」に耳をすませる。適宜、キリスト教「界」の思考についても紹介する。学生は、テクストに基づき、あるいはそれぞれの関心に基づいて「ともに生きる」ことに関する発表をおこなう。

フィールドスタディ２　　金 迅野 准教授
〈パンデミックの「同時代」を生きることの意味を考える〉

現代社会に生きながら「生きにくさ」を感じないことはまれなのではないか。「生きにくさ」の淵源はさまざまに把握しうるが、学生が自分なりの井戸をフィールド／生活世界の中に発見し、pandemic の時代の「生きにくさ」に対処すべき端緒を発見することの一助になることが本授業の目標である。適宜、キリスト教「界」の思考や実践についても紹介、議論したい。

「近代」が成立する過程で生じたいくつかの出来事にスポットを当てながら、近代の「光」と「影」が生じたのはなぜなのか、適宜キリスト教界の思想や実践にもふれながら、「光」や「影」は誰にとっての「光」や「影」であったのかを理解する。そのうえで、「影」の部分である「分断」、「格差」、「憎しみ」をくぐりぬけてどのように「和解」（自分との和解を含めて）をパンデミックのフィールド（現実）のなかに見出しうるのかを考える。適宜、キリスト教「界」の思考や実践についても紹介、議論したい。学生は、議論しつつ湧出したテーマに即して発表する。

キリスト教音楽研究１　　米沢 陽子 教授
〈ローマ・カトリック教会における典礼と音楽〉

ローマ・カトリック教会の典礼の二本柱であるミサと聖務日課の概要と、典礼に用いられる音楽について理解を深める。典礼音楽がどのようにして生まれ、歌い継がれてきたのかを学び、典礼における音楽が果たす意味について自ら説明できる。また、その学びを自分が関わる教会の典礼・礼拝に活かすことができるようにする。

基本的に講義形式で進めていく。西洋音楽の源であるグレゴリオ聖歌にも重点を置き、グレゴリオ聖歌がその後の音楽史にどのような影響を与えたのかを考察していく。各回で扱う音楽作品については可能な限りオリジナル楽譜を紹介し、実際に声に出して歌うことも試みたい。

キリスト教音楽研究２　　米沢 陽子 教授
〈ドイツ・ルター派のコラールと J. S. バッハの編曲技法－声楽作品（カンタータ）、オルガン編曲からの考察〉

ルター派のコラールの歌詞内容を理解し、バッハがカンタータや受難曲、オルガン作品のなかで歌詞の内容をどのように音として描こうとしたかを、楽曲分析を通して説明することができる。

バッハのオルガン・コラール作品を弾く

際、オルガニストは解釈の手掛かりをカンタータとコラールの歌詞に求める。バッハのカンタータや受難曲がルター派のコラールを基にして作曲されていることは周知のとおりである。この授業では、同じコラールに基づくカンタータとオルガン編曲を並べて取り上げ、バッハが共通の「素材」を用いてどのような手法で音楽を作り上げていったかを楽曲分析を通して考察する。基本的に講義形式で進めていくが、いくつかのテーマについては受講生に口頭発表を課す予定である。また必要に応じて演奏実践も取り入れる。

神学思想演習１　　福嶋 揚 講師
〈地球という「ともに暮らす家」のためのキリスト教〉

地球は、人間を含むすべての生物が「ともにくらす家」です。この「家」にとって、キリスト教という伝統宗教は、今日どのような役に立てるのでしょうか？この演習は、現代の神学と哲学の重要なテキストを読むことを通して、キリスト教に基づく理念と実践の可能性をグローバルかつローカルに探ることを目標とします。

地球という「ともにくらす家」は今日、貧富差の拡大、生態系破壊、戦争という三重の危機に直面しています。この破滅的な危機を乗りこえて、生態系と人間が共に生き延びるためには、これまでの文明、とりわけ経済成長一辺倒の産業的社会構造からの大転換が必要となります。そのような大転換は、キリスト教という伝統的宗教にとって、新たにもたらされた試練であるだけでなく、実はキリスト教の中にその大転換の種、原動力があります。そのことを現代の神学や哲学の様々なテキストを手がかりとして明らかにします。

神学思想演習２　　鳥居 雅志 講師
〈「場／無の神学」とわれわれ〉

現代の日本において提唱された「場／無の神学」に着目し、そこで語ろうとしていることをわれわれにとっての問題として考察する。

「場／無の神学」に深く関係している神学者・哲学者による著作などを読み、各参加者が取り組みたいテーマを一つずつ取り上げ、発題してもらい、それについて参加者全員で議論する。

なお、授業の進め方などに関しては、参加者と相談の上、柔軟に対応していく予定である。

キリスト教思想史演習　　桑原 直巳 講師
〈「恩恵」と「秘跡」〉

キリスト教史におけるキリスト教思想の伝統について学ぶ。それは単なる教会史、教理史の研究以上の現代的意義を有する学問実践となるインパクトを本来は備えている。というのも、現在の様々に複雑化した世界状況において、キリスト教が求められている役割は大きい。しかしながら、現在のキリスト教世界もまた、内部において対立、分裂状況を含んでおり、平和と一致に向けた歩み寄りが大きな課題となっている。そのような時代状況中で、様々な教団教派の歴史と伝統、それぞれの固有性に立脚しつつも、もう一度自らのよって立つところの源泉を再確認することは、自己理解

及び相互理解を刷新、深化せしめるとともに、そこに、照古照今、新たにして、古き、キリスト教の対話的相互理解の基盤を探り当てることを可能とするものである。

上記の授業の目的を達すべく、キリスト教思想家のテキストの神学・哲学的思想内容について理解を深める。今年度は、「恩恵」と「秘跡」をめぐるプロテスタント神学およびカトリック神学（特に第二バチカン公会議後）の動向を取り上げる。内容は受講者の様子によって変更される場合がある。テキストは日本語訳のあるものを取り上げる予定。

聖書学演習（旧約）1　　杉江 拓磨 講師
〈創世記 1 章および詩編 104 編の創造の記述を読む (Reading the creation accounts in Genesis 1 and Psalm 104)〉

創世記 1 章および詩編 104 編の創造に関する記述をヘブライ語原文で正確に読解し、その上で、テキストについての自らの解釈を説得的かつ論理的に表現できるようになる。

すでに習ったヘブライ語文法入門の知識をもとに、創造に関する創世記 1 章および詩編 104 編の記述を読んで解釈する。それにより、学生がヘブライ語聖書研究のために必要な釈義（本文解釈）の方法を身に着けることをめざす。

受講者には、ヘブライ語初級程度の知識と、毎回読むテキストを予習し、議論ができるよう準備することが求められる(辞書・文法書・注解書等、必読の文献はほとんどが英語のもの)。

聖書学演習（旧約）2　　杉江 拓磨 講師
〈創世記の洪水物語を読む (Reading the Genesis Flood Narrative)〉

必要な情報をまとめて客観的事実を分析する術を身に着け、創世記の洪水物語をヘブライ語原文から解釈できるようになる。

創世記の洪水物語を原典で精読しながら、関連する本文伝承上、文法上、文学様式上、歴史上の問題について考察する。特に、テキストの意味を導き出す適切な方法の習得をめざす。

受講者には、ヘブライ語初級程度の知識と、毎回読むテキストを予習し、議論ができるよう準備することが求められる(辞書・文法書・注解書等、必読の文献はほとんどが英語)。

聖書学演習（新約）1・2　　廣石 望 教授
〈『第一コリントス書簡』の釈義〉

先学期に引き続き、『第一コリントス書簡』を原典テキスト（古代ギリシア語）で読み、釈義的に検討する。

『第一コリントス書簡』はパウロの真正書簡のひとつであり、当時のローマ属州アカイアの州都コリントスにパウロ自身が創設したキリスト教共同体に宛てた書簡である（AD 55 年、エフェソスより発送)。都市コリントスはギリシアにありながらローマ的要素が顕著であり、商業が盛んで、ユダヤ人を含むオリエント系の住民も多く暮らしており、文化的・宗教的にきわめて多様であった。この多様性を本書簡も反映しており、古代の多文化社会におけるキリスト教のあり方を探る上で、格好のテクストである。

参加者は、各自が担当する現代語による注解書を読んでくる。発表者は、すべての注解書と、その他自由に参照する二次文献を踏まえつつ原典テキストを検討し、独自の釈義を発表する。その後、共同で討論を行う。

宗教史・宗教学演習　　加藤 喜之 准教授
〈消費主義社会における宗教―世俗化論の衰退を超えて―〉

近代化とともに宗教は必然的に衰退するという世俗化論それ自体が衰退して久しい。いまやグローバル化を遂げた世界は宗教であふれ、その理解には宗教の分析が欠かせないと言われるほどである。こうした状況を説明するためにこれまで「ポスト世俗化論」や「再聖化論」などが提案されてきた。なるほどグローバル化への抵抗としての原理主義的な宗教運動のある一面を理解するには、こうした理論も有効なのかもしれない。しかし消費主義がさらに加速化する空間において現れ出る宗教、あるいは宗教的なものを説明するには不十分だといわざるをえない。というのも、こうした場所における宗教のあり方は、グローバル化への抵抗としての宗教によくみられる強力な指導者や団体や信条が欠落しており、むしろ消費主義社会によく順応したかたちを取るからである。そこで本演習では、B・ターナー、D・ライアン、F・ゴティエ、山中弘らの論考を読み解きつつ、消費主義社会における宗教のあり方についての理解を深めていきたい。

本演習で参加者は、B・ターナー、D・ライアン、F・ゴティエ、山中弘らの論考を読み、消費主義社会における宗教のあり方を批判的に検証する。参加者は、指定されたテクストの箇所の分析をもとにした発表を行い、また学期末には各自の関心にそったレポートを提出する。レポートを提出するにあたっては、事前に文献解題を提出する。

キリスト教文化論演習１　瀧本 みわ 講師
〈初期キリスト教美術：キリスト教美術の誕生と形成〉

キリスト教美術の誕生とその発展について、考古学や美術史の研究を通じて、造形や図像の変遷を理解する。

キリスト教美術は、異教美術の伝統がゆきわたった古代末期の地中海世界の諸地域に生まれる。この授業では、その誕生と展開について、具体的な作例（建築、壁画、彫刻、モザイク、写本、工芸）を対象としながら、ローマ美術や諸宗教美術との関わり、図像学的な視点や造形的な特質を考察する。また、受講生は、学期内に一度、30 分程度の課題発表を行う。課題内容と日程は、第１回授業で決定する。

キリスト教文化論演習２　　本年度休講

宗教人間学演習　　米沢 陽子 教授
〈エンドオブライフと音楽を考える〉

人間の生活と音楽との結びつきを理解し、音楽を通じて人間という存在を捉え直す。音楽を手掛かりに、いかに生き、いかに人生の終りを迎えたいかを考え、自らのエンドオブライフをデザインすることができる。

誰もがいつか迎える人生の終末期。そのとき、あなたは誰とどこでどのように過ごしたいと望むだろうか。そしてどんな音楽を聴きたいと思うだろうか。

授業ではホスピス緩和ケア病棟における音楽療法の臨床で患者さんが聴きたいと望んだ音楽と、そのエピソードを紹介する。音楽の好みはその人のアイデンティティと深く結びついおり、患者さんは大切な思い出、自分のモットー、信仰、死生観をリクエスト曲に託す。患者さんが音楽に託した思いを知り、人間にとって音楽とは何か？という問いに向き合い、考察を深めていく。

アジア・キリスト教演習　折井 善果 講師
〈近世グローバル・ミッションにおける日本：C・R・ボクサー『キリシタン世紀の日本』を読む〉

本授業では、イギリス人歴史家C・R・ボクサー著『キリシタン世紀の日本1549-1650』を、主に邦訳書を使用しながら一章一章ていねいに精読し、近世初期日欧交渉史に関する知見を広めるとともに、当該史がどのような史料から構成されているのかについて、おおよその知識を取得することを目標とする。

1960年代にイエズス会の内部文書が一般公開されて以来、本邦の日本史研究者がヨーロッパ語史料に研究対象を拡張することによって新局面を開いたいわゆる日本の「キリシタン史」研究は、現在、近世初期のグローバル・ヒストリー研究へと発展的解消を遂げつつある。一方で、イギリス人歴史家ボクサー（Charles R. Boxer, 1904-2000）は、1951年に出版された“The Christian Century in Japan 1549–1650”において、日本人でもなく聖職者でもないという独自の視点から、すでに浩瀚な近世初期日欧交渉史を完成させていた。近年良質な邦訳が出版されたことから、その功績は改めて注目されている。本授業では、受講者の輪番制を採り、同著作を、原著をときに参照しながら丁寧に読み進め、いわゆる「戦国キリシタン」の名のもとに我々が有している一般知識から、さらに一歩踏み込んだ、同時代の世界史的規模での理解を目指したい。

宗教教育演習　菱刈 晃夫 講師
〈スピリチュアリティ（霊性）と教育との関わり、宗教教育思想について探る〉

スピリチュアリティ（霊性）と教育との関わり、宗教教育思想について歴史的かつ理論的な理解を深めることを目標とする。

スピリチュアリティ（霊性）と教育との関わり、宗教教育思想について、テキストや資料を手がかりに歴史的かつ理論的な観点から明らかにする。

フィールドワーク演習1　金 迅野 准教授
〈「聴くことの場」、「語ることの場」をいかに練り上げるか〉

さまざまなフィールドで出会う言葉を「聴く」とはどういうことか。また、「聴く」ことと「語る」ことはどのように関連しているのか。「聴く／語る」ことが生起する「物語」をキーワードに、いくつかのテキストの輪読を軸に、適宜、ワークショップや講義をまじえながら、わたしたちがかかえる、からだや言葉の貧困、わたしの／わたした

ちの責任についての考察を深める。

「読む」「聴く」「語る」「表現する」ことをテーマにした書籍を読む。併せて、さまざまな実践／ワークショップを経験しながら、「からだ」を通して思考することを共有したい。日常的におこなっていると漠然と考えている「聴く」、「ものを語る」という実践が、いかにフィールドの質を形成し、「生きにくさ」に対抗する生の核になるのかをともに考えたい。学生には、「あえて語らない」ことを含めた積極的な「参加」を求めたい。居場所を失ったこどもの声を聴く現場実践について、外部講師を招いて、「聴く」ことの意味について学ぶ予定である。

フィールドワーク演習２　金 迅野 准教授

〈ヘイト、災害などで「居場所」を喪った／奪われた人びとの生から学ぶ〉

川崎（訪問）、横浜・渋谷（訪問）、福島（オンライン講義）などのフィールドで行われているキリスト教会を軸とした実践から学ぶ。ヘイトクライムや災害、貧困などを通じて「居場所」を奪われた人びとの声を聴き、「生きる」ことの前提がどのように疎外されうるのかを学ぶばかりでなく、学生自身が自分の歩むべき道について考察する。

フィールドを訪問するに先立ち、地域の成り立ちの歴史に目を注ぎ、わたしたちの「いま」は何によって成り立ってきたのかを理解する。また、「声」を聴くことの意味、「声」を聴くということのエピステモロジーについても事前に学ぶ。さまざまな「声」に耳を傾け、事柄を外在的に学ぶのではなく、見聞きしたことの報告を通して、パンデミックの時代を「いかに生きるのか」という問いを抱きしめることにつとめる。フィールド訪問に関しては、学生と実施日を相談しながら決めていく。併せてcovid19の感染状況を鑑みながら訪問を適宜オンラインに変更する。

サーヴィスラーニング１・２

金 迅野 准教授

〈学問領域と実社会をつなぐ〉

自発的な思想と奉仕の精神に基づき、一定期間、奉仕活動をおこない、それを通して実社会での「働き人」としての資質を高める。

サーヴィスラーニングは、学問領域と実社会をつなぎ、学問的知識が実社会で具体的に役割を担うことを通じて、学生本人と受け入れ先団体双方が学びあい、強められること（互恵性、reciprocity）を目指した教育プログラムである。「役割・責任を担うことが人を育てる」（Position makes a person capable）との考え方に立ち、現場で一定期間具体的な役割・責任を担って奉仕活動を行う。

具体的には，1）サーヴィスラーニングの意味･内容･方法についてのオリエンテーション、2）学生自身の関心と課題に基づいてフィールド・受入れ先を一箇所選定して「計画書」を作成、3）受入先団体の確認が取れた後に奉仕活動を実施、4）活動終了後に「報告書」を作成し、学びの共有･還元を兼ねて受け入れ団体とともに振り返り、5）これからの働き人としての新たな出発点をつくる。

オルガン演奏法１・２　　崎山 裕子 講師
〈キリスト教の礼拝におけるオルガン奏楽法〉

教会での奏楽経験者を対象とし、国や時代、教派によって様々に異なるオルガンの演奏法を学び、教会音楽奉仕者に必要不可欠な知識と技術を習得する。オルガン演奏や奏楽の初心者は受講の対象としない。「オルガン演奏法１」と「オルガン演奏法２」の両方を受講することが必須。所属する教会の礼拝で実践することを目標とする。

３人を上限とするグループレッスンを原則とし、互いの演奏を聴き合うことで、客観的かつ的確な聴力を養う。オルガンの楽曲のみなら、聖歌やチャント、詩編の伴奏法を学び、言葉と音楽の関係性について考察する。楽曲や楽器によって異なる演奏法を習得し、適切な音を選ぶ技術を養う。上級者は、奏楽に必要な編曲法や即興法を課題とする。

合唱・聖歌隊指導法１　　大島 博 講師
〈基礎を学ぶ〉

礼拝等における音楽の役割をより豊かにするため、合唱指導の際に必要な知識、技術の基礎を習得することを目指す。

基本的にグループレッスンの形をとって実習するが、必要に応じて個別の指導も加える。賛美歌やコラール等を題材に、発声、発音、歌唱法、指揮法の基礎を学ぶ。取り上げた作品についてレポートし、また、受講生同士で模擬練習、指導を体験して、それらに対する意見交換を行う中でより良い指導の道を探る。

合唱・聖歌隊指導法２　　大島 博 講師
〈実践力をつける〉

合唱・聖歌隊指導法１で学んだことを踏まえて、より実践的な指導法について実習し、音楽的な表現力を高める。

基本的にグループレッスンの形をとって実習するが、必要に応じて個別の指導も加える。簡単な聖歌やモテットを題材に、音楽的な表現について考え、受講生同士での模擬練習、指導を通して総合的な指導のあり方を探る。

声楽基礎演習　　本年度休講

会衆賛美論演習１　　米沢 陽子 教授
〈ドイツ・ルター派教会の礼拝における会衆賛美―宗教改革期からバッハまで―〉

宗教改革直後から 18 世紀に至るルター派の会衆賛美の概要を理解し、ルターが実現しようとした礼拝の在り方を考察し、会衆賛美に関する基本的な知識を身に付ける。

宗教改革により「礼拝が刷新され、祈りの言葉も讃美歌もラテン語からドイツ語に変わり、人々は高らかに自分たちの言語で神を賛美した」と一般には捉えられている。それは誤りではない。しかし、当時のルターの言説からは、ただちに全てがラテン語からドイツ語に移行したわけではなかったこと、会衆がコラールを歌おうとしなかったことが読み取れる。授業ではできる限り一次資料の復刻版やファクシミリ版を紹介しながら、ルター派の礼拝の変遷を見ていく。割り当てられたテーマについて口頭発表を

課す。また必要に応じて演奏実践も取り入れる予定である。

会衆賛美論演習２　　米沢 陽子 教授
〈日本におけるキリスト教音楽の歴史〉

日本におけるカトリック教会、プロテスタント教会それぞれの歴史と音楽を知り、礼拝における音楽の意味を考察し、現代の典礼・礼拝における課題に対し自分の考えを述べることができる。

第１～７回は映像資料や録音資料を用いた講義形式とするが、第８～14回は演習形式で行なう。あらかじめ提示されたテーマの中から各自の関心に沿って選択し、口頭発表を行なう。発表で取り上げた讃美歌・聖歌はクラス全員で歌い、ともに理解を深めていく。

教会音楽史演習１　スコット・ショウ 教授
〈英国キリスト教会音楽〉

英国キリスト教会音楽を理解すること。

この授業はイギリス（英国）のキリスト教音楽を説明する。イギリスの宗教音楽は聖歌隊の音楽（特に主教座聖堂とチャペル）、と会衆の音楽（教区教会の音楽）に分けられるため、別々に説明される。この授業は講義形式で行い、音源と楽譜を使用するため、楽譜を読める必要がある。受講生は宗教改革以前のイギリス礼拝音楽から現在の教会音楽事情まで学ぶ。

教会音楽史演習２　　米沢 陽子 教授
〈16～18世紀のイタリアとドイツにおけるオルガンとその音楽〉

オルガン音楽について、時代や地域、楽器や典礼・礼拝様式との関係から説明することができる。

またオルガン奏楽者は作品に相応しい様式感を身に付けることができる。

この授業では16～18世紀のイタリアとドイツのオルガン音楽のレパートリーを扱う。オルガン音楽は作曲された時代や地域、楽器、典礼・礼拝様式と密接に結びついている。各回で取り上げる作品に対しては、典礼・礼拝様式、楽器、記譜法、楽曲分析からアプローチし、個々の作品がどのように成り立っているのかを考察する。なおオルガン音楽は歌との関係を抜きには語れないので、関連する聖歌の歌唱も随時行なう。演習形式で行なうので、割り当てられたテーマについて口頭発表を課す。また必要に応じて演奏実践も取り入れる。